日本周辺クロマグロ調査委託事業（抄録）

森脇晋平

水産庁が実施する北太平洋のまぐろ類等の資源評価に必要な資料を整備することを目的とする事業の一環として、本県海域のまぐろ類等の漁獲データ・生物学的情報を収集した。

詳細は「平成６年度　日本周辺クロマグロ調査委託事業報告書　水産庁　１９９５年３月」に報告されているので、ここでは結果の概要を述べる。

調査の内容

１．属人統計と属地統計

「漁業・養殖業生産統計年報」（農林統計）でのまぐろ類の漁獲統計について

①「自県の漁業者による他県の市場への水揚げ」は水産高校の実習船による遠洋まぐろはえ縄のマグロ類がある。ただし、聞き取りによるとクロマグロの漁獲はなく、ビンナガ、メバチ、キハダである。

②「他県の漁業者による自県の市場じぇの水揚げ」は、一昨年の夏に長崎船籍の大中まき網漁船がヨコワを浜田漁港に水揚げした例がある。漁業種類、水揚げ量、水揚げ港などは特定されるのでチェックは可能である。

したがって、本県の場合農林統計の「まぐろ／めじ」の数値は属地統計上の値とみて差し支えないと思われる。

２．漁獲努力量について

①まき網（漁労体数）：大中型　　３　　中型　　３７

クロマグロを対象にした漁業ではないが、後述するように今年度のようなヨコワの多いときには混獲状況に注意する必要がある。

②定置網（漁労体数）：大型定置網　４６　　小型定置網　１６４

③曳縄：今年度は1986年以来８年ぶりに県中央部海域を主漁場とするヨコワの本格的な水揚げがあった。ここを漁場とした漁協からの聞き取りによると、ヨコワを対象にした漁船は最大時で約80隻／日である。

３．平成６年度の漁況

本県の定置網へのクロマグロの入網は４月に始まり６月下旬にはほぼ終了した。７月以降の漁獲はなかった。例年に比べ早く始まり早く終わり、漁期が早まったようである。魚体は体重40Kg台のものが主体であった。量的には昨年をやや上回った。来遊の特徴は、本県沿岸での滞留がなく、「足早」に北上した印象を受けた。スルメイカも同様な移動をした感じを持っている。

一方、11月からヨコワの曳縄漁業が始まった。昨年、一昨年とも漁業が成立しなかったが、本格的な水揚げは1986年（昭和61）年以来である。魚体は尾叉長で50cm台後半と40cm付近にそれぞれモードをもつ２つの群から構成されていた。漁期がすすむにつれて小型化していったそうである。日本海へのクロマグロ幼魚の加入量には５～６年の周期があるといわれているが、今漁期のヨコワの来遊の原因はよくわからない。